

M.O.B. の検討

三浦 恭志 川上 紀明
 松原 祐二 夏目 直樹
 名城病院整形外科

Key words: MOB (Multiply operated back), 原因 (Causes)

はじめに

再手術を必要とする症例を1例でも減らす助けとするために、複数回手術症例の検討を行った。

対 象

平成5年4月以降に腰椎に再手術を施行した症例、あるいはそれ以前に複数回の手術の既往があり現在診療を行っている症例から、当初から2期的手術を予定していたものを除外した17症例を対象とした。内訳は男性12例、女性5例。年齢は21から82歳であった。

結 果

年齢構成は、脊椎手術全体では10歳台の側弯症のピークを除くと、40歳から70歳台でピークを形成している。これに対し再手術症例では、ピークは40歳台であるものの、20代から30代の症例が比較的多い特徴があった(図1)。

原疾患は、腰椎椎間板ヘルニアが11例と最多で、他に腰部脊柱管狭窄症3例、外傷2例、沁り症1例であった。当院の脊椎手術全症例では、腰椎椎間板ヘルニアおよび腰部脊柱管狭窄症がそれぞれ約15パーセント、沁り症および外傷がそれぞれ約5パーセントを占めており、これと比較し

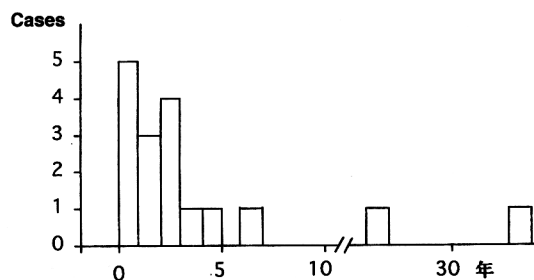


図 2. 再手術までの年数

て、腰椎椎間板ヘルニア症例で再手術の頻度が高い結果であった。

再手術までの期間は2カ月から34年で、術後1年までに5例、1から2年で3例、2から3年では4例であり、大半の症例が術後数年以内に再手術を受けていた(図2)。

初回手術後の経過は、術後症状の改善が見られ良好な経過中に再び症状が再発した症例が7例、不十分なながらも改善が見られた経過中に再悪化した症例が7例、術後改善が見られないか、不十分なため再手術となった症例が3例であった。

再手術の直接原因は(表)、初回手術レベルの問題として、ヘルニアの再脱出が7例と最高であった。他に、変性の進行や不安定性が出現したため

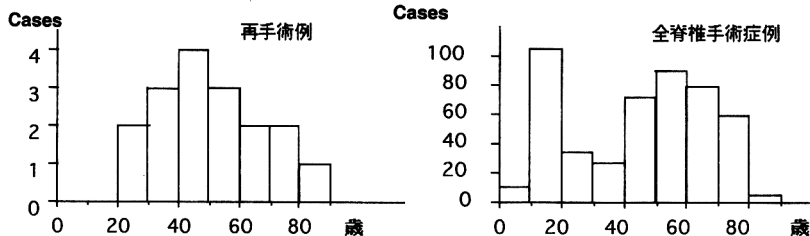


図 1. 年齢構成